わたしの聖戦（ジハード）
女性が働くということ ⑱⑤

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

松本清張の時代

松本清張の出世作のひとつに「点と線」がある。何度も映像化されているので、内容やトリックについては多くの人が周知していることと思う。この小説の見せ場は、なんといっても「4分の空白」を使ったアリバイ作りだ。

当時、東京駅の13番線から15番線が見えるのは、1日のうちたった4分しかなかった。14番線には、東海道線や横須賀線の列車が絶えず出入りするためだ。犯人は、その4分の間に、被害者であるふたりの男女が15番線から特急に乗る姿を13番線からわざと他の人に見せ、自分の無実を証明しようと試みる。このように書いてしまうとあっけない話になってしまうが、物語は最初、心中遺体が発見するところから始まり、この心中が偽装であることを見抜くにあたって、「4分間の空白」が浮かび上がってくる。最初に小説を読んだときは、緻密なトリックに思わず唸ってしまうほどの衝撃を受けた。

小説が発表されたのは、昭和30年代のはじめ。新幹線もなく飛行機もなじみ薄い時代で、若い人には時代背景そのものがピンと来ないかもしれない。清張自身、時刻表を見るのが大好きで、暇さえあれば時刻表を手にしていたという。スマホで簡単に時刻を調べることが当たり前の今の時代なら、この優れた推理小説は誕生しなかっただろう。

最近「スマホ認知症」という言葉が話題になった。認知症対象の「物忘れ外来」を訪れる患者の若年化が進んでいるというのだ。スマホから入る情報量は膨大なため、脳は、いわゆる情報過剰状態に陥ってしまう。すると、深く考えたり想像を広げたりすることができなくなり、記憶力の低下や感情のコントロールが困難になるらしい。ある専門クリニックでは、患者の30%が40代～50代、10%が20代～30代だという。スマホの利便さは改めていうまでもないが、その一方で私たちの脳は少しずつ壊れていくのかもしれない。

また、本来、軽くカーブしているはずの首の骨が、スマホの使い過ぎでまっすぐになってしまうスマホ首（ストレートネック）の人は、なんと国民の80%にものぼるという。これは、人類が二足歩行を遂げたことに匹敵するほどの大きな変化といえるだろう。

しばしば論争となる邪馬台国について、それを著した「魏志倭人伝」には、投馬国（とうまこく）から邪馬台国までの行程が「水行（すいこう）十日 陸行（りっこう）一月」と記述されている。これをどう解釈するかによって邪馬台国がどこにあったか、卑弥呼が存在したのかどうか、という考え方に違いが出てくる。清張の短編「陸行水行」には、実際にこの記述に従って邪馬台国の在り処を突き止めようとするふたりの男性が登場する。結局彼らは、恐らくは荒波に襲われ、目的を達する前に死んでしまう。邪馬台国に魅入られたふたりが、古代人にならって月の明るさに照らされながら小船を漕ぐ姿は、想像するだけで美しく切ない。清張の骨太の筆の行間からにじみ出る哀切さに、涙したことを思い出す。

読んだ小説から想像力を育み、情景を思い浮かべ、しばし呆然となるほどの感動に浸る。

その喜びは何ものにも替えがたく、便利さと引き換えに人間のあるべき感情まで喪ってしまうことに恐ろしささえ覚える。

スマホやAI（人工知能）の台頭が、人類の進化にどのような影響を与えるのか、もはや誰にもわからない。

イラスト・伊藤栄章